

歳神を迎える

黒田 一 充

大晦日の夜は、普段とは違うことをする伝承が各地に残っている。大阪府熊取町和田では、「大晦日の夜は、宝を積んだ車や馬が来るから家の戸を少し開けておき、徹夜をして眠らない」という話を、明治33年生まれの方からうかがったことがある。また、高野山の南西、和歌山県美里町（現在・紀美野町）長谷宮のあるお宅では、明治39年生まれの方から「大晦日の夜は、家族の人数分の草履を用意して、鼻緒に半紙を巻いて縁側に置く。その横に注連を張った大きなお櫃を置いて炊事場から汲んだ水を入れ、一升入る柄杓でその水を汲み、若水として顔を洗う」とうかがった。時代劇で旅籠に着いた旅人が、まず玄関で宿が用意した盥の水で汚れた足を洗う場面を連想させる。遠くからやって来る客人を迎えるための用意であろう。各家で、門松や注連飾りをするのは、こうした歳神（正月の神）を迎える準備なのである。

そうかと思えば、この夜は何か悪いものも外をうろついているようである。長崎県壱岐島の郷ノ浦町では鬼の夜とされ、「この夜におとなしくしていない子どもは、家の外に出されて鬼にさらわれるのだ」という話を聞いた。大晦日の夜に百鬼夜行に出会う話は、『今昔物語集』（巻16—32話）にも記されている。

夜明けまでに無事、歳神を家に迎えることができ「明けましておめでとうございます」と祝うのである。



写真1 木津川市加茂町銭司・春日神社境内の砂まき (2012年撮影)

このような伝承だけではなく、目に見える具体的な形で歳神を迎えるところもある。京都府南部の木津川市加茂町銭司は、木津川の北側斜面に形成された集落である。集落背後の山の中腹に春日神社がある。この神社では、大晦日の前日から翌年の宮守を中心に正月を迎える準備が行われる。本殿正面の石段下に門松を飾り、神社の裏山から採ってきた椎の割木を7～8本ずつ束にし、注連縄を張ってシダの葉を付けた斎木を本殿や小祠前の左右に飾る。それが終わると砂まきが行われる。参道の土のところは、道を横切るように砂で線を引いて梯子模様にし、途中の少し広い場所と境内は、格子模様に砂をまく（写真1）。

境内の準備ができると、17時前に籠り場の囲炉裏に置かれた檜の生木に火を付ける。この木は福櫓と呼ばれ、この火が消えるまで宮守が神社に籠もる。現在は1月3日の午後まで籠り、4日は朝から東組・西組の当番が勧請縄を作って掛けるが、昔はその翌日の5日朝まで籠っていたという。

このような砂まきは、西隣の井平尾の春日神社や、南西の山間部に入った観音寺の三十八神社の境内でも行われていたが、現在はなくなっている。こうした事例をあげると、神社の行事のように思われるかもしれないが、大晦日の砂まきは、京都府南部の宇治市から奈良県北部、大阪府枚方市や交野市などの地域で、個人の家の庭で行っていた報告がある。

銭司でも数年前まで庭先に格子模様を描いていた家があったとのこと



写真2 大和郡山市野垣内町の砂まき (2010年撮影)



写真3 大和郡山市観音寺町の砂まき（2010年撮影）

であり、観音寺でも波形や飛び石を描いていた。寿などの文字を書くところもあるようだが、木津川などの河川の砂は採取ができなくなったことや、アスファルトに砂をまくと車のタイヤが滑るため、だんだんやらなくなっているという。

模様ではなく、砂道を引くところもある。大和郡山市野垣内町の春日若宮神社では、摂社の住吉社・稲荷社から引かれた砂の線が本殿の前で一本になり、そのまま真っすぐ正面の鳥居の外まで延びている（写真2）。社前の道路に出て左右に分かれるが、境内の角のところで途切れている。南隣の観音寺町の八幡神社でも、本殿から鳥居の外へ向かって砂の線が引かれ、末社や観音堂・地藏堂・手水舎などから延ばした砂の線が合流する。砂道は、鳥居から集落内に出て、すぐの辻を左右に分かれたところで途切れている（写真3）。

同市白土町の白坂神社では、氏子の各地区から選ばれた年番の宮守たちが注連縄などの準備をし、境内を掃き清めると夕方から砂道を引く。鳥居前の道路を東西の辻まで道路上に砂をまいて道を作り、最後に拝殿の入り口から真っすぐ鳥居に向かって道を引いていく（写真4）。昔は川の砂を使ったそうだが、現在は買ってくる



写真4 大和郡山市白土町の砂まき（2011年撮影）

という。

これらの砂道は正月様の道だといい、3地区とも道路が舗装されていなかったころは、神社の砂道を延ばして、各家の玄関までつないでいたという。初詣の際には、踏まれてなくなっていくが、各家から氏神社までの参詣路を示すとともに、正月に神が各家を訪れていることを目に見える形で表している。

このほかにも、大晦日の夜に実際に神が訪れる所作をするところもある。奈良市東部や山添村から宇陀市、桜井市にかけての東山中と呼ばれる地域では、福丸迎えという行事がある。家ごとに行うところと、子どもたちが集団で行うところがあるが、火の付いた松明を持って唱え言をしながらか福丸を迎えることが共通している。

天理市伊豆七条町では、この福丸迎えの行事が奈良盆地の中で唯一残っており、かつてはもっと広範囲に行われていたことが推定できる。

日が暮れると、子どもたちが青竹を持って各家を廻る。迎える家では、玄関先や庭に藁束を組んでおき、子どもたちがそこに火を付けて、火の中に青竹を突っ込みながら「フクマルコッコー、フクマルコッコー」と火が消えるまで唱え言をし（写真5）、そのお礼にお菓子を受け取る。本来は男の子だけの行事だが、少子化のため近年は女の子も加わるようになっている。しかし、調査時は男の子1名と女の子3名の小学生たちが行事に参加していたが、翌年は男の子ひとりだけになったという。

歳神の迎え方はさまざまであるが、古くから伝えられる民俗では、1年の区切りである大晦日の夜は特別な過ごし方をする夜なのである。



写真5 天理市伊豆七条町の福丸迎え（2010年撮影）

文学部教授